

ある。この二重の組織は闘争力を分散させ、殊に部分的には身分闘争を輕視する經濟主義的偏向が生れ、運動が不活動となつたのである。

(ハ) 更にいま一つ主要な原因となつてゐることは、水平社が従來現れた差別事象に對する概念的な闘争にのみ没頭し、勤勞部落民大衆の切實な要求である文化的、經濟的施設の要求獲得の闘争（それこそが身分關係の根柢に對する闘争として發展する）を戦はなかつたことである。現れた差別事象に對する亂彈闘争をのみ行つて來た水平社は、差別事象の現れが減少したことによつて闘争の對象を見失ふに至り次第に運動の退化と闘争の不活潑とを招かざるを得なかつたのである。

(二) 水平社運動に現れた主なる偏向

(イ) ヨロレタリートの解放なくして部落民大衆の解放は

あり得ない。従つて部落民解放運動はヨロレタリートの指導の下に階級闘争の一部分として戦はれねばならない。然るに全國水平社はその綱領に「特殊部落民は部落民自身の行動に依つて絶對の解放を期す」といふ一項を持ちヨロレタリートの指導を拒否してゐる。これは明かに排外主義であり、水平社第一主義である。今日までの水平社運動は部落民解放運動を階級闘争の一部として理解せず、部落民独自の闘争として分離し「部落民自身の行動に依つて」絶對の解放があり得るかとの如き幻想を興へてゐた。かゝる排外主義は誤謬であるばかりでなく反動的である。

(ロ) 差別事象に對する水平社の「徹底的攻撃」闘争は、身分關係の基礎である「マジヨ」地主的絶對主義支配に對する闘争から部落民大衆の反抗をせよ、「一農民」